



## 背中を押してもらって得た今は 誰かの背中を押す今に

ごみから希望を生み出す  
優しさあふれるペットボトルアーティスト

大山 智寛 さん

### ごみが生む感動とお金

制作した作品の売上が環境支援や難民支援に寄付している大山智寛さん話を聞きました。

コロナ禍で断捨離がはやった頃、当時住んでいたマンションのごみ集積所に集められたごみの多さに驚いた妻が、その処理や行き先を調べ始め、環境問題に必死に取り組み始めました。自分も何かできることはないかと調べていた時に、ペットボトルやプラスチック食器で花を作る動画を発見。見よう見まねで一輪の花を作り、SNSに載せたところ欲しいという人がいました。同じ頃、娘からお小遣いを難民支援団体に寄付したいと相談がありました。拾ったごみに手を加えることで循環が生まれると思い、作品の制作・販売を始め、売上金を寄付し始めました。作品作りの転機となったのは妻と出かけた講演会で、海ごみを使った作品を手掛けるアーティストの存在を知ったこと。ごみが感動とお金を生むことに強い衝撃を受けました。そして、講演者がSNSに私の作品を投稿してくれたことがきっかけとなり、当時海洋プラスチックアート

の拠点施設・TRUE BLUEを手掛けていた作家・高橋歩さんとつながることに。高橋さんからTRUE BLUE第1号店のランプシェードの制作依頼を受けたことで、作品作りに対する考えが大きく変わりました。

### 背中を押してくれた妻

ランプシェードの制作期間はわずか1カ月。納期に間に合わせようと会社の行き帰りの電車の中でさえも作業に徹しました。完成したのは納品当日の家を出る10分前。そのまま作品を持って沖繩に飛びました。設置を終え、多くの皆さんから感動の声をもらったことで、本格的に作品作りをしたいと思いはじめました。

やりたいことでは家族を養っていくことが難しいと葛藤していたとき、親戚だった叔父の急死に直面しました。「人はいつ死ぬかわからない。明日かもしれない」そう考え、後悔しない選択をしようとして妻に相談すると、返ってきたのは「親だからやってやりたいことをあきらめるのはよそう。仕事辞めちゃえ」という言葉でした。子どもたちにはやりたいことをやってと言いつつ、自分にはどうするか……。子どもたちにはやりたいことをやっている親の姿を見せたいと願った妻の言葉に背中を押され、仕事を辞めて安曇野に移住。さまざまな



奄美大島生まれ神奈川育ち。大学卒業後は都内のアパレル関係の仕事に就く。安曇野へは2023年に移住。作品作りの技術提供に力を入れ、現在はフィリピンのセブ島の海上スラム支援に関わっている。



tomogallery HP

**MEMO**  
**TRUE BLUE**  
沖繩・古宇利島を拠点に、海で回収した海洋プラスチックでアート作品や生活雑貨等の制作・販売やアップサイクル体験を提供する工房&ショップ。  
○エコアートプロジェクト  
環境保護等への関心を高めることを目的に廃材やリサイクル素材で作品を制作し、アートを媒介に地域を活性化させようとする取り組み。

縁にも恵まれ、家族がそろって笑い合える豊かな暮らしができています。現在は受注品制作の傍ら、エコアートプロジェクトとして海上スラムの住人にペットボトルアートの作り方を教えています。ごみをアートへ。そして、それが彼らの収入となるよう、私が背中を押してもらったように、私も誰かの背中を押せたらうれしいです。

## 初夏の安曇野を 自転車で疾走!

5月10日 信州サイクルロゲイニング2025\_安曇野Stage



地図を片手に自転車でチェックポイントを回り合計点数を競うサイクルロゲイニングが安曇野全域をフィールドに開かれました。このイベントは、全4戦で競われる信州サイクルロゲイニング2025シリーズの第1戦目。当日は52人の参加者が、初夏の安曇野を5時間かけて思い思いのペースで巡りました。

初めて参加した笠原美寿々さん(31・塩尻市)と丸山彩香さん(31・豊科)は「カフェに立ち寄るなど自分たちのペースでエンジョイできた。自転車で走らないと見られない景色を発見できた」と30歳の自転車旅を振り返っていました。

## みんなハッスル! ハーフマラソン前日もスポーツ一色

5月31日 安曇野スポーツフェスティバル2025

信州安曇野ハーフマラソンの前日にさまざまなスポーツを楽しむイベントがANCアリーナで開かれました。ごめさんこと中込孝規さんのダンスワークショップやニュースポーツ体験では、元気に体を動かす親子連れの姿が見られました。また、翌日の大会ゲストが登場したトークショーでは、有森裕子さんと三津家貴也さん、志村美希さんが競技を始めたきっかけや大会の魅力を紹介。本番を前日に控えたランナーは、軽快なトークをリラックスした表情で興味深く耳を傾けていました。第2回大会から出場している内田瑛さん(33・松本市)は「YouTubeでなじみのあるゲストから前向きな言葉をかけてもらえて当日も頑張れそう」と意欲を見せていました。



## 体験から学ぶ お米の味と大切さ

5月15日 園庭ミニ田んぼ 田植え・おこひる



雲一つない青空の下、有明あおぞら認定こども園の園庭ミニ田んぼでは本年も田植えが行われました。この行事は、食と農のPRと自然保育の推進のために始まり、本年で4回目。この日は年長児31人が牛乳パックで作ったびくを腰に付け、4月に浸種し有明営農組合協力のもと大切に育てた苗を笑顔で植えました。

田植え後にはきな粉おむすびが振舞われ、昔からある農家の「おこひる」文化も体験。後藤なつめちゃん(6)と石田はな乃ちゃん(6)は「足が泥だらけになって楽しかった。お米のおこちゃんが大きく育ってほしい」と苗の成長を心待ちにしていました。

